論　文　ニダバ (*Nidaba*) 34(2005), 155-164

文末表現における日本語の男性語と女性語

― 芥川賞文学作品の調査を基にして ―

曹　春　玲

1．はじめに

日本語には男女差がある。では、現代日本語の口語では男女ことばどのように使われているのだろうか。以下の文章は 1993 年に発表された芥川賞受賞文学作品の『寂寥郊野』からの抜粋である。現代日本人の日常生活の会話を生き生きと映し出ていると思われるので、引用してみたい。

F：　いまから帰るわ。二十分くらいで着くと思うの。
　　ねえ、ユキエの具合が悪いのよ。家で休ませてあげたほうがいいわ。
M：　どうしたんだい。うちを出る時は何ともなかったのに。
F：　疲れているのよ、きっと。ゆっくり寝かせてあげて。
　　夕食の支度は無理だと思う。途中で何か買って行くわ。欲しいものはある？
M：　いや。何でも構わないが。いったい、どうしたんだね。
　　風邪でも伝染ったのかな。
F：　そういうんじゃないの。疲れているだけだと思うわ。
M：　ユキエに替わってくれないか。
F：　彼女、興奮しているのよ。今、ソファーで横になっているわ。

（F＝女、M＝男）

日本語では、上記の会話場面のように文末に「わ、ね、の、よ」などの終助詞をつけて話者の気持ちを表すことが多い。社会言語学的に言えば、日本語の終助詞は男女差、職業層などを表す機能を備えているということになるだろう。

本研究では、このような終助詞の使い分けが現代日本語の話しことばにおいてどの程度行われているのか、また男女の会話においてどのように異なるのかを調査することを目的としている。この目的に沿って、本研究では対象を文末の終助詞にしぼり、終助詞における男性と女性の話しことばの現状を分析する。筆者は、日本語の男女ことばが、社会言語学的な視点から、どのように変化してきたかについて歴史的に捉えてみたいと考えている。本研究はそれを試みる前提として行った男女ことばの歴史的変化を調査するためのパイロット研究と位置づけている。

2、先行研究

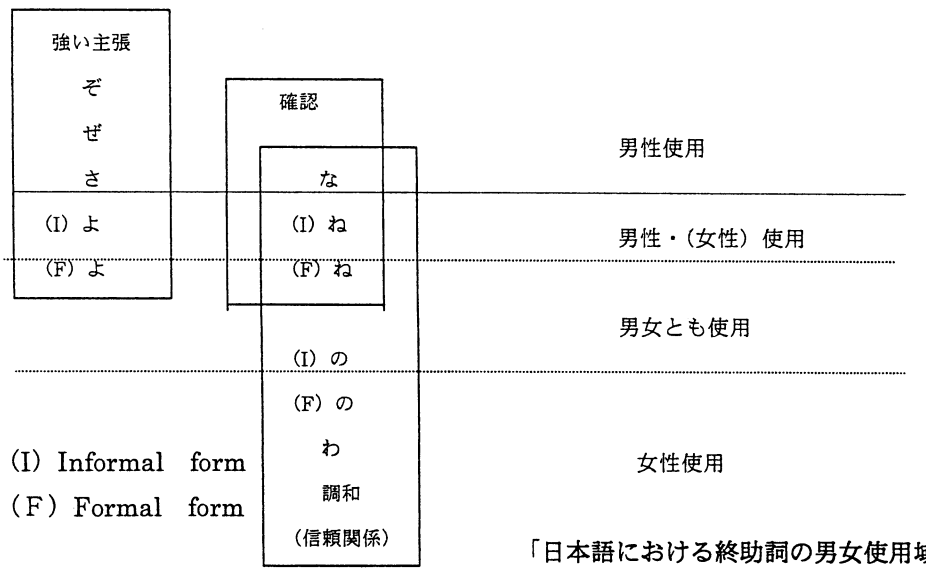
2.1　終助詞とは

西田（1992：193）によると、終助詞とは、述語の終末部にあって、内容的・意味的なまとまりを形成した文の叙述や判断をうけて、それに対する話し手の感動や詠嘆を表出したり、疑問、希望、禁止などを付け加え、聞き手への働きかけの態度を表明するなどの役割を担うものである。その上、日本語の終助詞は、とりわけ日常生活の話しことばにおいて、話し手の性別、年齢などによって、さまざまに使い分けがされている。

さらに、佐久（1991：59）によれば、終助詞は語句の終りに現れ、感動詞のような意味を含み、文の判断を相手に持ちかけて禁止したり、希望を伝えたり、教示したり、質問したり、念を押したりするもので、自分自身に対して文の判断に疑問を表明したり、慨嘆したりする際にも使われるものである。用言だけにつく「ぜ、ぞ、わ」や、用言と助詞とにつく「な、なあ、ね、ねえ、の、よ」など、会話において、男女話者の感情をそえる働きをしている。たとえば「雨が降るか」といえば、「雨が降る」という判断全体を相手に持ちかけて問うことであり、「雨が降るぞ」といえば、「雨が降る」という判断全体を相手に教示するわけである。一般的に「雨が降るか」と「雨が降るぞ」という話し方は、女性はしないが、男性がよくすると思われる。このように、終助詞の用法には、話し手の性差が大きく影響すると考えられる。（マグロイン・花岡 1997：33）。

2.2　終助詞に関する男女差

日本語の終助詞について、日常会話での男女の使い分けを McGloin（1991：田中 1996 から引用）は図のようにまとめている。下記の図は、文尾につける８つの助詞を機能によって３種類に分け、それぞれ男女による使用の範囲を図式化にしたものである。



「日本語における終助詞の男女使用域の違い」
（McGloin、1991：36）より

上図では、終助詞における男性語と女性語について、いくつかの特徴が明らかにされている。たとえば、「わ」と「の」は、話し手と聞き手の関係の調和を保つために、もっぱら女性が使う。「ぞ」「ぜ」「さ」「な」は、強い主張や確認をする気持ちを表すもので、原則的に男性が使用する終助詞とされている（田中1996：67 ）。芥川賞文学作品の用例を見てみよう。

1）ばされるだけですんだのは、よかったほうだぞ。・・・・・・・男 20 代社員（05-1992）
2）とにかく何か食って、ちょっと寝ようぜ。・・・・・・・男 30 代テレビ監督（25-2003）
3）ただしプリントじゃなくて、随分精巧な複写だったな。・男 40 代教師（20-2001）
4）じゃ、いっか、私も行くわ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・女 10 代高校生（26-2003）
5）お見舞いに来たの。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・女 10 代高校生（26-2003）
6）私ね、この公園で妙に気になってる人が二人いるのよ。・女 30 代社員（23-2002）

（カッコ内の数字は参考文献欄に示した文学作品の篇数番号と発表年）

例１、２、３の「ぞ」「ぜ」「な」は男性専用の終助詞であるが、独言の場合には女性も用いる。たとえば「今度こそ頑張るぞ」とか「またテレビを見てるな」などの場合である（マグロイン・花岡 1997：33）。例４、５、６の「わ」「の」「よ」は女性専用の終助詞である。「わ」は自分の言いたいことを軽く主張し、表現を和らげ、多く女性が使用すると考えられる（佐久 1991：62）。「の」は、文を名詞節化することにより、間接的、つまり相手との心的距離を広げ、より丁寧な言いまわしとなる、したがって、女性的だというのである。女性の使う「の」は聞き手にわかってほしいという気持ちの表れであり、聞き手との協調性をはかる手段と考えられる（マグロイン・花岡 1997：38）。「のよ」は助詞に下接するもの「の＋よ」の形で女性専用終助詞とされる（遠藤 1998）。

最後に、日本語の男女ことばについて、益岡・田窪（1992：222）は、かなり体系的な区別を行っているが、それは絶対的なものでなく、使用場面による差や個人差も大きいとしている。本研究では、以上の先行研究の実例を参照し、かつ益岡・田窪の観点を基に、1990 年以降、話しことばの特徴が顕著に表れる終助詞が男女間でどのように使われているのか、その実態を分析していくこととする。

3．データの概要

終助詞における男女差を観察するために、本研究では現代日本語の特徴をよく表していると思われる芥川賞作品の言語データを対象として分析を行った。文学作品であるため、日本人の実際の日常生活の話しことばからの逸脱が予想されるが、芥川賞作品は現代日本語によって、書かれており話しことばの男女差の全体像を把握することができると考えた。

言語データは 1990 年から 2003 年の間の同賞受賞小説 26 篇を対象とした。具体的に登

場人物の会話に使われた終助詞を、性別、年齢別、職業別に分析した。登場人物が多様なので、彼らを便宜上学生、社会人、主婦、その他の4グループ、年齢は①20代以下、②23-30代、③31-40代、④41代以上、⑤その他に分けた。発話者は男性105人、女性は86人で、終助詞を使った発話総数は、男性1659回、女性2011回である。発話回数は、話者から話者へのターンを基準に数えた。以下では、これらの発話を対象として、文末表現形式について分析を行う。

4．終助詞の分類と頻度

今回のデータで得られた終助詞を整理し、男女の使用頻度と、語全体に占める比率を表1に示している、以下ではその主なものについてみていく。

表1　終助詞の種類と使用頻度の男女別

番号	終助詞	男性 (N=105)	%	女性 (N=86)	%
1	かい	17	1.0	1	0.0
2	だい	5	0.3	1	0.0
3	かしら	9	0.5	52	2.6
4	こと	0	0.0	1	0.0
5	さ	106	6.4	26	1.3
6	ぜ	28	1.7	0	0.0
7	ぞ	26	1.6	2	0.1
8	ね	412	24.8	517	25.7
9	な	298	18.0	64	3.2
11	の	119	7.2	430	21.4
12	や	7	0.4	0	0.0
13	よ	628	37.9	740	36.8
14	わ	4	0.2	177	8.8
	合計	1659	100.0	2011	100.0

4.1　「ね」について

4.1.1　「ね」の機能

（1）「ね」は、聞き手の認識によって、または、聞き手の前で、話し手が自分の認識を確かなものにするときに使われる終助詞である。基本的な用法は、話し手が自分の認識よりも聞き手の認識のほうが確かだと考えることについて、自分の認識を聞き手の認識と同じ水準まで高めようとする時に使われるもので、これは「念押し」と言われる。これがも

っとも一般的な「ね」の用法である。たとえば、「あの女房は泣きもしなかったそうだね」では、話し手についての事実であっても、話し手自身の認識のほうが不確かであるため「ね」がつけられている。

（2）聞き手がどう思っているかということについての認識は、いつの場合も話し手の認識よりも聞き手自身の認識のほうが優先される。そのため、話し手は自分についてのことがらについても、相手の認識については、念押しの用法で「ね」を使う。たとえば、「私は出て行くことになりますが、それでいいわけですね。」のような例が挙げられる。「ね」は発言前には、まだ認識が成立し終わっておらず、「ね」の発言によって認識が成立することを表す場合もある。たとえば「あんときは、さすがに俺も慌てたね」、「俺は少なくとも見たことないね」の場合は、その経験についての意識がそれまで消えており、この発言によって再確認されている例である。また、「ね」は聞き手自身に認識を成立させることのほうにかなり重みがあって、それを言えば、聞き手も「なるほどそうか」と思ってくれるだろうというような同感の期待があるように思われる（陳 1987：97）。

4.1.2　「ね」の性差

7）こんは警備員さんに連れて行ってもらうからね。　(26-2003)

8）なに川（人名）、わたしそろそろ帰るね。　(26-2003)

9）んたのあかちゃん、もうどこにもいないんだね。　(11-1995)

例７－９のように、文末に使われている「ね」は男性で 412 例、女性で 517 例が見出された。男性の場合には「ね」の前に助動詞「だ」を伴う「だね」がよく使われる。一方、女性の場合には「ね」の前に終助詞「わ」や「よ」を組み合わせて「わね」「よね」の形としてよく使われる。副詞、名詞、形容詞、たとえば「日曜日」「そう」「きれい」に続く場合、男性は「日曜日だね」「そうだね」「きれいだね」と「だ」を挿入し、女性では「そうね」「日曜日ね」「きれいね」のように「だ」を避けて、副詞、名詞や形容詞に直接「ね」がつくとされる（白川 2001：278）。これらに着目しながら「ね」の分布状況を調べた結果をまとめたのが、次の表 2 である。

表 2　「ね」と「ね」に前接する語形の男女別頻度

	M	%	F	%
ね（え）	291	70.6	281	54.4
だね	57	13.8	32	6.2
だよね	17	4.1	15	2.9
だわね	0	0.0	1	0.2

てね	20	4.9	27	5.2
のね	3	0.7	32	6.2
のよね	0	0.0	23	4.4
よね	24	5.8	42	8.1
わね	0	0.0	51	9.9
わよね	0	0.0	13	2.5
合計	412	100.0	517	100.0

①「ね（え）」は男性 291 例で全体の 70.6％で、女性 281 例 54.4%である（以下、全体における百分率をカッコ内に提示）。女性の比率と比べると、男性の方が 16.2%高い。単独で使われる「ね」については男女の比率の差はあるものの、男女とも使う終助詞であると思われる。

②「だね」は男性 57 例（13.8％）、女性 32 例（6.2％）を占めている。表 3 のまとめを見れば、現在、従来の男性専用形式の「だね」を女性も使うようになっていることがうかがえる。これは、女性が男性専用形式を使う方向に変化している可能性を示していると思われる。

③「だよね」は男性 17 例（4.1％）、女性 15 例（2.9％）であり、男女比率がほぼ近接している。

④「だわね」は、男性による使用例は 1 例も見出さなかったが、女性でも 1 例あったのみである。用例が限られているため、断定はできないが、女性専用形式が衰退していることを示しているのではないだろう。

⑤「てね」は男性 20 例（4.9％）、女性 27 例（5.2%）で、比率は低いが、男女とも同じ程度使っていることがわかる。

⑥「のね」は男性 3 例（0.7%）、女性は 32 例（6.2％）で、男女とも使用率はあまり高くないとものの、女性のほうがより多く使うようである。

⑦「のよね」、「わね」、「わよね」は男性による使用例は皆無である。一方、女性は「のよね」23 例（4.4%）、「わね」51 例（9.9%）、「わよね」13 例（2.5%）であった。このデータの全体から言えば、女性使用比率が高くはないが、女性専用であると言えるだろう。

4.2 「よ」について

4.2.1 「よ」の機能

（1）「よ」は話し手がすでに認識し、聞き手がまだ認識していない情報について、話し手が聞き手に対して、伝える必要があると判断して伝えるときに、使われる終助詞である。また、聞き手が知らず、話し手が知っていることを述べるのにも使われることから、話し

手や第三者についての事実を知らせる文は非常に多く、聞き手についての事実を知らせる文に使われることは非常に少ない。たとえば、「あなたはもう二十六くらいやってますよ」という例文は聞き手について事実であるが、聞き手自身が忘れてしまったことを、話し手が記録を見て教えてあげているのである。

（2）「よ」は命令、禁止、希求など、広い意味での働きかける文にもつく。この場合も、話し手と聞き手の間に認識のギャップがあって、それをうめるために使われる。働きかける文をきちんと分類するのは大変だが、たとえば、a）相手がそれをする必要性をまだ感じていない事柄をさせるとき、「もっとちゃんと書きなさいよ」、b）相手が話し手の命令に応じない時にさらに命令するとき、「いい加減にしてくれよ」、c）聞き手がしない、あるいはきちんとしないことをおもんぱかって話し手があらかじめ注意していうとき、「だめだよ。無理しちゃ」などは、目的はちがっても、認識のギャップをうめる点で共通している。

（3）「よ」はある情報について、「聞き手の認識の度合が話し手より低い」、あるいは「それについて聞き手の認識を高める必要がある」と話し手が判断するときに使われる。ところが、そのことについて聞き手が「自分の認識の度合が低くない」、また「その認識を高める必要がない」と判断した場合には、聞き手によっては、その話し手の発言はおせっかいであり、押し付けであると感じることになる。たとえば「指をさされてドロボーって言われるよ」のような発言はその可能性をもっている。

いずれにしても、「よ」は聞き手と話し手の認識のギャップを、話し手が情報（認識の結果）を伝えるというかたちで埋めるときに使われるものであるという点が肝心である（陳 1987：95）。

4.2.2 「よ」の性差

「よ」の男女差について、益岡・田窪（1992）は「述語の普通体につけると男性的になる。たとえば、「知ってるよ」。断定詞ダ、ナ形容詞の基本形の語尾ダを省略したものにヨをつけた言い方は、女性的表現になる。」としている。たとえば、男性は「有名だよ」女性は「有名よ」。

10）早く行かないとアポロンが可哀相だよ。　(17·1999)
11）この頃の若いは、まったくしっかり。がっちりしてるよ。(19·2000)
12）地下鉄の出口よ。　(24·2003)

分析の結果、例 10－12 のように、文末に使われている「よ」は、男性で 628 例、女性で 740 例が見出された。遠藤（1998：77）は終助詞「よ」の使われ方の男女差を改変、整理して次のような一覧表にまとめている。

	女性的表現とされるもの	男性的表現とされるもの	中性的表現とされるもの
よ	名詞・副詞＋よ 助詞に下接するもの わよ、のよ、てよ、	述語の普通体に下接するもの、動詞・助動詞＋よ イ形容詞＋よ	述語の丁寧体に下接するもの、です＋よ ます＋よ

これらの用法を着目しながら、「よ」の用法のいくつかについて本データを整理した結果を表3に示す。

表3　「よ」と「よ」に前接する語形の男女別

	M	%	F	%
よ	394	62.7	341	46.1
ことよ	0	0.0	1	0.1
だよ	203	32.3	52	7.0
てよ	4	0.6	16	2.2
のよ	27	4.3	263	35.5
だわよ	0	0.0	4	0.5
わよ	0	0.0	63	8.5
合計	628	100.0	740	100.0

①「よ」は男性394例（62.7%）、女性341例（46.1%）を占めている。男女両方とも使っているが、女性的表現とされるものより、男性的表現とされるものの方が多いことがわかる。

②「だよ」は男性203例（32.2%）、女性52例（7.0%）で、男性専用形式とされることが示されている。「だよ」を女性も使う傾向にあることがうかがえることである。

③「のよ」は男性が27例（4.3%）、女性が263例（35.5%）、「よ」全体に占める割合は男性4.3%に対して女性35.5%で、女性のほうが使われる率がかなり高い。女性専用形式とされていることがわかる。

④「てよ」は女性専用とされてきたが、男性の使用例もある。例えば、1）重いんだな。おりてよ（40代以上の男）。2）勘弁してよ（若い男）。「てよ」は女性16例（2.2%）、男性4例（0.6%）で、男女とも使われる率が低いと言えるが、女性のほうが使うようである。

⑤「ことよ、だわよ、わよ」は男性による用例は皆無である。「ことよ、だわよ」はそれぞれ女性に1例（0.1%）と4例（0.5%）で、使用例はわずかである。この点で、女性専用形式「ことよ、だわよ」の使用結果を見れば、全体的に使われなくなっていると思われる。「わよ」は女性のみに63例（8.5%）見られ、女性専用であると言える。

5．まとめ

以上、1990 年―2003 年に発表された 26 篇の芥川賞受賞文学作品によって、現代日本語の終助詞の使い分けと使い方を男性語・女性語という観点から分析してきた。主な結果は以下の通りである。

（1）現代日本語における、終助詞「こと、ことよ、だわね」は女性専用形式であったが、現在は女性もこれらをあまり使わない傾向にあることをうかがわせる。

（2）男性専用とされる終助詞「かい、だい、ぜ、ぞ、や」の比率はむしろ低く、どちらかと言えば現在では少数派である。おそらく衰退に向かっていると思われる。

（3）終助詞「わ、わよ、わね、だわ」について、女性はそれぞれ使用頻度が同様ではないが、分析の結果からは女性専用であるように思われる。

（4）「ね、よ」は男女の使用率は両方とも高い。しかしながら、助動詞「だ」＋「ね・よ」のような「だね・よ」の形式は、男性の方がよく使うことがわかった。つまり、男性専用形式とされることを示していると思われらる。従来、「だね、だよ」は男性表現とされてきたが、本研究の結果からは女性も使うようになっていることがうかがえる。

（5）男性専用とされる「な、さ」は今でも男性の方が多用することがわかった。

（6）「の」は今も女性専用終助詞とされている。しかしながら、この形式は男性もわずかながら使用するようになっていることがうかがえ、さらに調査が必要だと思われる。

以上を総括すると、従来の研究で指摘されてきたのとは異なり、現代日本語では、男性語と女性語の終助詞の使い分けはかなり多様化していると考えられる。

6．今後の展望

日本語では男性語と女性語の区別があるのは周知の通りであるが、時代や社会の変化につれて、男女ことばも変化している。本稿では動態的な研究を試みる前提として、現代日本語について 1990 年以後の男女言葉による差を文学作品に基づいて考察してきた。今後の課題は、話し言葉において、男性語と女性語は歴史的な変化があるかどうか、変化があれば、どのように変化してきたのかを追求することである。

言葉の変化は社会構造の変化と無縁してはない。戦後の半世紀、日本の社会は大きく変化してきた。この激動の時代にあって、日本人の生活様式も急激に変化してきた。たとえば、女性の生活、特に服装が、もんぺからズボンになるというふうに、動作の敏捷を尊ぶものが用いられるようになっていった。この変化に、女性の言葉も著しい影響を受けてきたことは想像に難しくない。しかも、現代日本社会では男女平等によって、女性は外に出て各種の職業につくことが多くなってきた。女性語はだんだん中性化、あるいは男性化されようとしている（遠藤 1997：166）。社会の要請が女性を活動的にし、活動的になった女性は言葉も活発になる。しかし、この変化の中で、女性語が男性語に近づいたと考える

のは短絡的である。男性語のほうも女性語に近づいているのかもしれないからである。本研究は、ことばの変遷が男性語と女性語の中でどのように反映されてきたのかについて歴史的に探求していきたいと考えている。

参考文献

益岡隆志・田窪行則（1992）「ことばの男女差」『基礎日本語文法』改訂版、くろしお出版
遠藤織枝（1997）『女言葉の文化史』学陽書房
――――（2002）「男性語のことばの文末」『男性のことば・職場編』ひつじ書房
大野晋（1992）「日本語の助動詞と助詞」『岩波講座日本語７　文法Ⅱ』岩波書店 pp. 3-28
国立国語研究所（1991）『現代語の助詞・助動詞　―用法と実例』東京秀英出版
金水敏（2003）『ヴァーユアル日本語　役割語の謎』岩波書店
佐久間鼎（1991）『現代日本語法の研究』くろしお
白川博之（2001）『日本語文法ハンドブック』株式会社」スリーエーネットワーク
鈴木睦（199７）「女性語の本質」井出祥子編『女性語の世界』明治書院 pp. 59-73
田中章夫（1992）「助詞３」『岩波講座　日本語７　文法Ⅱ』岩波書店 pp. 361-454
田中春美（1996）『社会言語学への招待』ミネルヴァ書房
マグロイン・花岡直美（1997）「終助詞」『女性語の世界』明治書院 pp. 33-41
陳常好（1987）「終助詞」『日本語学』10 月号　明治書院 pp. 93-109

芥川賞受賞文学作品（1990－2003）

01 辻原登	（1990）『村の名前』	02 小川洋子	（1990）『妊娠カレンダー』
03 荻野アンナ	（1991）『背負い水』	04 松村栄子	（1991）『至高聖所』
05 原智美	（1992）『運転士』	06 多和田葉子	（1992）『犬婿入り』
07 吉目木晴彦	（1993）『寂寥郊野』	08 奥泉光	（1993）『石の来歴』
09 笙野頼子	（1994）『タイムスリップコンビナート』		
10 保坂和志	（1995）『この人の閾』	11 又吉栄喜	（1995）『豚の報い』
12 川上弘美	（1996）『蛇を踏む』	13 柳美里	（1996）『家族シネマ』
14 目取真俊	（1997）『水滴』	15 花村萬月	（1998）『ゲルマニウムの夜』
16 平野啓一郎	（1998）『日蝕』	17 藤野千夜	（1999）『夏の約束』
18 町田康	（2000）『きれぎれ』	19 松浦寿輝	（2000）『花腐し』
20 堀江敏幸	（2000）『熊の敷石』	21 玄侑宗及	（2001）『中陰の花』
22 長島有	（2001）『猛スピードで母は』	23 吉田修一	（2002）『パーク・ライフ』
24 大道珠貴	（2002）『しょっぱいドライブ』		
25 吉村万壱	（2003）『ハリガネムシ』	26 綿矢りさ	（2003）『蹴りたい背中』